研究者：岡本　卓真（所属：愛知学院大学歯学部小児歯科学講座）

研究題目：発達障害児における離乳環境とう蝕罹患状態との関連性について

目　的：

近年，母乳育児の推進や支援の動きが広まったことから，母親達は一定時期に断乳するのではなく，長期授乳を続け，自然卒乳を目指す傾向がある。その一方で，長期にわたり就寝時に母乳を与えることや，ミルクや糖質を含む飲料を哺乳瓶に入れて飲ませることは，歯科的な観点において，多発性のう蝕を引き起こすため注意を要する。

桑田らは，定型発達児を対象に卒乳時期とう蝕罹患性との関連について，卒乳時期が遅くなるほどう蝕罹患性が高くなることを報告している。

今回我々は，発達障害児を対象に，離乳環境とう蝕罹患状態との関連性を調査する目的で，離乳完了時期を 4 つの年齢区分グループに分け，授乳方法およびう蝕との関連について調査・検討したので報告する。

対象および方法：

調査対象：A 市早期療育施設内歯科を初診受診した初診時年齢 3 歳～5 歳の発達障害児のうち本研究の主旨に母親の理解と協力が得られた 54 名（男児 40 名，女児 14 名）を対象とした。

調査方法は，授乳方法と離乳完了時期について母親への聞き取り調査を行い，口腔内診査記録から初診時のう蝕罹患状況を調査した。

なお，本研究は，愛知学院大学歯学部倫理委員会の承認を得ている（承認番号 224）。

分析方法：離乳完了時期を 1 歳 6 か月未満，1 歳 6 か月～2 歳未満，2 歳～2 歳 6 か月未満，2 歳 6 か月以上の 4 群に分け，1 人平均う蝕歯数，授乳方法，授乳方法別 1 人平均う蝕歯数を比較した。なお，授乳方法においては，母乳群および人工乳・混合乳群の 2 群に分類した。

統計学的分析は，1 人平均う蝕歯数の比較には一元配置分散分析および Scheffe の多重比較，授乳方法の比較には $\chi 2$ 検定および Fisher の直接確率計算法，授乳方法別 1 人平均う蝕歯数の比較には t 検定を用いた。

結果および考察：

【結果】

1）1 人平均う蝕歯数においては，1 歳 6 か月未満が 0.9 ± 1.8 歯，1 歳 6 か月～2 歳未満が 1.4 ± 2.3 歯であり，それぞれ 2 歳～2 歳 6 か月未満の 7.0 ± 4.9 歯，2 歳 6 か月以上の 8.7 ± 6.8 歯に比して統計的な有意

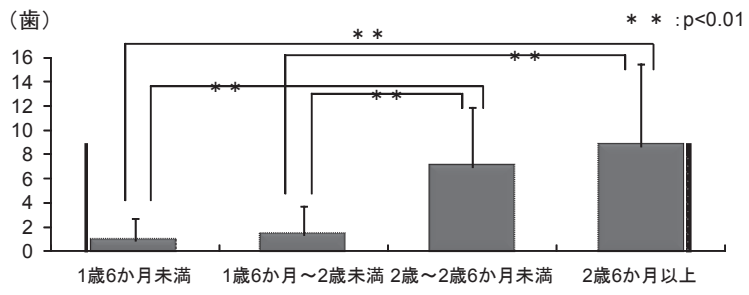


図 1　離乳完了時期別 1 人平均う蝕歯数

差が認められた（p＜0.01）。（図1）

2）授乳方法において，母乳群が，1歳6か月未満では，22.2%と少ない割合であったが，以後離乳完了時期の年齢が遅くなるに従って増加する傾向を示し，2歳6か月以上ではその割合が75%であり，1歳6か月未満との間に統計学的な有意差が認められた。（p＜0.05）（図2）

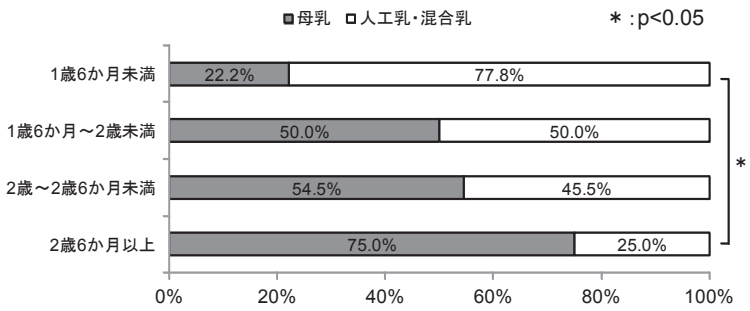


図2　離乳完了時期別授乳方法

3）授乳方法別1人平均う蝕歯数の比較では，1歳6か月未満，1歳6か月～2歳未満，2歳6か月以上では，母乳群および人工乳・混合乳群間に統計的な有意差は認められなかったものの，2歳～2歳6か月未満においては，母乳群が9.7歯であり，人工乳・混合乳群の3.8歯に比して統計学的に有意に高い値を示した（p＜0.05）。（図3）

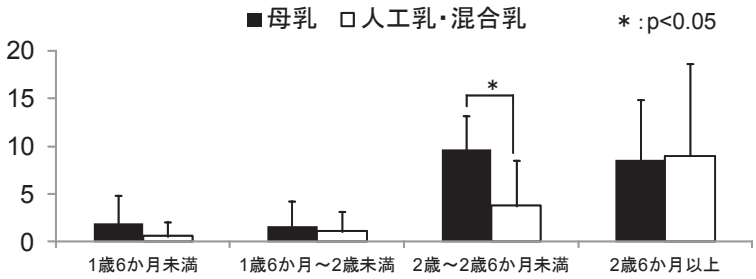


図3　各離乳完了時期における授乳方法別1人平均う蝕歯数

【考察】

本研究の結果より発達障害児は，離乳完了時期が2歳以上の場合，う蝕が顕著に多くなることが明らかとなった。さらに授乳方法の比較から，母乳授乳は，離乳完了時期が遅くなるに従って多く認められるとともに，その時期が2歳～2歳6カ月未満の場合，人工乳・混合乳に比してよりう蝕になりやすいことが明らかとなった。

平成19年に厚生労働省で作成された授乳・離乳の支援ガイドでは，離乳の完了は1歳6か月までがよいとされている。しかしながら発達障害児は，発達そのものが遅くなる傾向にあるため，遅くとも2歳までには完了するよう支援していく必要があると考えられた。

成果発表：（予定を含めて口頭発表，学術雑誌など）

第49回日本小児歯科学会（2011年11月28日，29日）発表

現在　学術雑誌投稿準備中